

黑龍江省檔案館編

東北日本移民檔案(黑龍江卷) 6

廣西師範大學出版社

黑龍江省檔案館編

東北日本移民檔案（黑龍江卷）6

廣西師範大學出版社

· 桂林 ·

目 录

1	镜泊学园调查报告书 (秘)	满铁经济调查会	一九三六年二月	1
2	北满土地利用状况及国线背后地开拓状况概要(北满国铁沿线召垦适用地调查资料之一)			
		哈尔滨铁路局北满经济调查所	一九三六年三月十二日	103
3	滨北·北黑·齐北·讷河沿线召垦适用地调查 (极秘)	(北满国铁沿线召垦适用地调查资料之二)		
		哈尔滨铁路局北满经济调查所	一九三六年六月六日	126
4	滨江省内召垦适用地调查资料(滨江省实业厅调查) (极秘)			
		哈尔滨铁路局北满经济调查所	一九三六年六月三十日	207
5	自由移民有畜农业经营案(北满农地开拓会社计划·参考案) (极秘)			
		满铁经济调查会	一九三六年九月	232
6	开拓篇			261

昭和十一年二月

調查係

鏡泊學園調查報告書

滿鐵經濟調查會

昭和十年八月十日

第五部 新 植民班
居

芳 郎

經濟調查會委員長殿

昭和十年五月二十四日ヨリ六月十日ニ至ル二十三日間軍ノ鏡泊學園調査
ニ同行致シタルニ付同學園ノ現状並其ノ概要一一般ニ就テ御報告致シマス

(一) 鏡泊學園附近ノ自然

一、鏡泊學園ノ位置

學園ハ瀋江省寧安縣鏡泊湖沿ニアリ之緯度ノ上ニ求ムレハ略北緯四四度四分東經一二八度二五分ノ地點ニ位スルト見ラレ、南敦化縣敦化ヨリ一〇五杆ノ距離ヲ有シ北方ハ寧安縣東京城ヨリ約五〇杆東延吉縣小城子(李樹溝)ヨリ五〇杆ノ地點ニ位置シ西側ハ牡丹江ノ上流、水源地トナツテ居ル鏡泊湖ヲ控ヘテ居ル

二、交通關係

土地カ山岳地ニ依テ包繞サレ匪賊ノ危險アル地位ニアリ而モ兩期ニ於テハ道路泥濘ニシテ車馬ノ運行極メテ困難テアルカラ六月！八月ニ至ル夏期ノ進行ハ一般ニ杜絶スル事カ多ク、之ニ反シ冬期ニ於テハ地下一米！一。五米凍結シ路面硬化シテ通行便利ヲ増スカ故ニ交通量ハ著シク増大スルト見ラレル殊ニ水上交通鏡泊湖ハ冬期十二月頃ヨリ凍結ヲ始テ翌年三月頃迄ハ解氷セサルカ故ニ寧安、東京城ヘノ交通不便トナル、以下簡單ニ交通狀況ヲ記セハ敦化！學園！東京城

城間冬期間ハ次ノ經路ニ依テ約七時間ニテ連絡サレ得ル。

敦化—干溝子陸路—二等國道ニシテ路幅約一〇米兩側ニ溝ヲ有ス。

ニヨク干溝子—學園—北湖頭間—結水期間自十二月至翌三月ハ水上ヲ通過

シ北湖頭—馬咀子—東京城ハ陸路トシ自動車ニテ約七時間ニテ連絡

スルコトカ出來ル—水上鏡泊湖ヲ利用スルコトナク陸路ノミニ依ル

時ハ一時間延長シ八時間ヲ要ス—王把街子—學園ハ松乙嶺ノ峠ヲ修

理改良スル時ハ自動車ニテ約四時間ニテ連絡スルコトカ出來ル。

道路交通機關トシテハ一般ニ荷馬車大車類ヲ唯一ノ交通機關トシ貨

物輸送ハ專ラ之ニ依據シテ居ル

鐵路總局ノバスハ毎日定期運行ヲ爲シテ居ル—夏期ノ泥濘期ハ中止—

三、通信

右ノ状態カラ推シテ冬期間ノ通信連絡ハ容易ニ爲サレ得ルカ夏期ノ
交通杜絶期ニアツテハ殆ト連絡不能、學園若ハ駐屯軍隊ノ連絡ノ際
ニ之等ノ不便ヲ充ス程度ヲ月二回位ノ程度テアル其ノ間學園所有ノ
無電機ニ依リ學生之依リ敦化、寧安、吉林等ト連絡通信ヲ爲シ信

營ニ依ル連絡ノ不便ヲ補ツテ居ル。
尙學園ニ於テハ軍用鳩ヲ飼育シ訓練シ近距離ニ於ケル爲通信其ノ他
ノ便ニ供シテ居ル。

鏡泊湖附近ノ氣象

(1) 氣 溫

鏡泊學園ニ於テ昭和十年三月二十一日（春分）ヨリ五月二十一日（小湊前日）迄六十二日間ニ亘ツテ行ハレタ氣象觀測ノ實驗結果ヲ見レハ平均氣溫ハ四・四度ヲ示シ最低氣溫ハ〇・一度、最高一七・五度（三月二十二日）ト記録サレテキル

之ヲ參考ノ爲牡丹江ニ於テ舊北滿鐵路管理局カ一九二〇年ヨリ一九二九年ニ至ル十箇年間ニ於テ觀測シタル實驗結果ノ氣溫ヲ掲ク

レハ次ノ如クテアル

(1) 月別平均氣溫

二月	一月	月別	氣 溫	三月	二月	月別	氣 溫	
(一) 一六・七・	(一) 二〇・九度	月別	氣 溫	(一) 五・八度	(一) 一六・七・	月別	氣 溫	
四月	三月	月別	氣 溫	(一) 五・八度	四月	三月	月別	氣 溫
(一) 七・五・一・	(一) 五・八度	月別	氣 溫	(一) 五・八度	(一) 七・五・一・	月別	氣 溫	
六月	五月	月別	氣 溫	(一) 一・二・九度	六月	五月	月別	氣 溫
(一) 一八・五・	(一) 一・二・九度	月別	氣 溫	(一) 一・二・九度	(一) 一八・五・	月別	氣 溫	

4-

七月	(H) 二八・四度	九月	(H) 二二・〇度
八月	(H) 二六・六・	一〇月	(H) 一二・二・
		十一月	(H) 〇・二度
		十二月	(H) 一一・五・

右ノ如クテアツテ鏡泊學園附近ノ氣溫カ單ナル一回ノ觀測結果ニ依ル數字テアル關係カラ之ヲ平均的ナ恒常數字トシテノ牡丹江ノ夫レトヲ比較スルコトハ妥當ヲ缺クハアルカ一般ノ情況ヲ知ルニハ役立チ得ルテアラウ

即チ右ノ數字カラ見レハ學園附近ノ氣溫ハ牡丹江附近ニ於ケル其レヨリモ稍低溫テアリ最低氣溫カ〇・一テアルコトハ牡丹江附近カ四月ニ於テ(一)一・七度、三月(一)一二・五度ニ比スレハ稍高イ指數ヲ見ルモノト謂フコトカ出來ヤウ。併シ平均氣溫ニシテモ最低氣溫ニシテモ亦其ノ最高氣溫ニ於テモ其處ニ大ナル相違振幅ヲ示シテキナイコトハ一般ニ氣溫ノ高低カ相類似シテキルノ事實ヲ示スモノテ其レハ學園附近ノ氣溫カ牡丹江附近ノ氣溫狀況ト略同様ナ事情ニアルコトヲ示シテキルノテハナイカト考ヘラレル。

7-

降水量

月別平均降水量

月別	降水量	月別	降水量	月別	降水量
一月	三・七耗	五月	五四・七耗	九月	六一・〇耗
二月	四・八・	六月	六五・三・	一〇月	四一・〇・
三月	一一・〇・	七月	一二五・〇・	十一月	一三・一・
四月	二二・四・	八月	一一〇・九・	十二月	五・四・

テアルニ對シ學園ノ計量結果ハ計四七。六耗ヲ示シ之ヲ月別平均ノ牡丹江ノ其レト比照スルトキ降水量ニ於テモ之ニ大ナル逕庭ヲ見出スコトハ出來ナイ。

以下學園調査ニナル氣象狀況ヲ見レハ

晴天日數 四七日

曇天日數 一五日

晚 霜 五月十日 (牡丹江地方ハ四月二十九日一五月十九日迄)

暴風日數 三日

テアツテ右ノ氣象狀況テアルコトハ氣象的ニハ農業經營カ牡丹江地方ト同様ニ可能テアルコトヲ示シテキルト謂フコトカ出來ヤウ

五、鏡泊湖附近ノ土性土質

土地ハ一般ニ丘陵性ノモノ多クシテ高低必シモ同質テハナイカ概シテ砂質壤土他ハ植質壤土カ一般テアツテ肥沃度ハ山寄りノ地帶カ高ク湖岸、低濕地帶ハ一般ニ瘠惡ノ地カ多イ

六、鏡泊湖附近ノ地勢

該地域ノ地勢ハ山岳ヲ以テ蔭蔽サレテキルノ一言ニ盡キル。即チ之ヲ鳥瞰スレハ鏡泊湖西岸ハ遠ク小白山山脈ノ連山カ相重疊シテ一大障壁ヲ形成シテ居リ南側ヨリ東側ニ亘ツテハ喀爾巴嶺山脈ノ諸峯カ擁カツテ其ノ中ニハ西四方臺、三仙嶺、松乙嶺等カ一方ヲ包シ全體トシテ之ヲ見レハ之等ノ諸峯ニヨツテ該地域ハ鏡泊湖ヲ中心トシテ一方ニ開放サレタ屏風形ノ封鎖的ナ自然ノ地勢ヲ形成シ從テ之等ノ二大山脈ノ分水的作用ニヨツテ生シタル小溪小流ハ一方ニ集メラレ

9-

テ低窪地タル該地域ニ合流此處ニ牡丹江ノ貯水、水源地トシ
 泊湖ノ役割カ附與サレテキル
 右ノ地形ノ然ラシムル所ハ驅ツテ鏡泊湖附近ノ地勢カ一般ニ
 ニ富ムタ平原地帯ノ少イ地域トシテノ特色ヲ生セシメル結果トナツ
 テキル。該地域ニ於テハ松乙溝流域ノ濕地帯ノ一小部分ヲ除イテ平
 原地ト目セラルヘキモノハ殆ト之ヲ見ルコトカ出來ス地形ハ一般ニ
 緩カナルハ約二―三度、急ナルハ一五度内外ノ傾斜ヲ有スノ形狀テ
 アツテ耕地モ亦此ノ傾斜ヲ利用シテ漸次緩傾斜ノ地帯カラ開墾サレ
 分布サレテキル。從テ平原地ニ於ケルカ如キ大面積ノ農業經營ハ不
 可能デアル。




(二) 鏡泊湖附近ノ農村社會經濟事情

一、農村社會及其ノ聚落狀態

サウシタ自然條件ヲ備フル該地域ハ舊文化ノ發展ノ根據テアツタト謂ハレル東京城ヲ離レサルニ拘ラスサウシタ自然的條件ハ其處ニ封鎖的ナ孤立的ナ農村社會ノ發展カ可能テアツタト見ラル可ク經濟的ニハ交通ノ便利カ冬期間ニ於テ其ノ量ヲ増加シ夏期ニ於テ減少スルト謂フ事實ハ其レ丈部落ノ農家經濟ヲ特殊化スル譯テアリ自給自足の經濟ヲ強制サセル譯テアル例ヘハ經濟的餘裕ノアル農民ハ春ノ解氷前ニ次ノ解氷迄所要スル物資ノ全額ヲ購入スルコトヲナシ其レカ恰恠ナ事テアルトサレテキル事實ハ明カニ該附近ノ部落社會ノ經濟的特質ヲ示スモノト謂フ事カ出來ヤウ

該地域ニハ時々石斧ヲ發見シタリ**窟**ノ遺蹟ヲ發見シタリ若ハ土地ノ生産力カ殆ト枯渴スルニ至ル迄掠奪式農法カ行ハレテキル所テアルコトヨリ推シテ言クカラ民族社會ノ存有カアルモノト認メニ

テアル

-11-

鏡泊學園ノ設立以前ニ既ニ先住民族ノ生活カアツタモノテ必スレモ
 數字ハ嚴密度ノ高イモノテハナイカ其ノ概數ヲ知ル爲ニ其ノ數字ヲ
 求ムレハ次ノ如クデアル此ノ部類ニ包含サレルモノニハ鮮人ト滿人
 カアル
 鮮人戸數ハ次表ノ如ク

部落・名	戸數	男	女	計
南湖頭	五五	二四三	一七三	四一六
房身溝	六二	二二五	一五九	三七九
松乙溝	五二	一八六	一二一	三〇七
計	一六九	六五四	四四八	一一〇二

學園調査ニヨル滿人戸數

屯名	戸數	屯名	戸數	屯名	戸數
大河口	四七	半截溝	九四	計	五四八
褚家屯	一四八	房身溝	二九	南湖頭	一四五

右ノ如クテアツテ一戸當六人トスレハ約三千六百名ノ人口數ヲ有スルコトトナリ該地域一帯ニ居住スル人口數テアツテ之等ノ戸口、聚落状態ハ地域的ニハ力ノ弱イ即チ散居的ナ部落トシテ聚落ヲ形成シ自然ノ地形ニ依テ右ニ掲ケタ如キ部落名ノ下ニ大キナ地域ニ分布シテキルノヲ見ル。學問ノ所在地タル湖沿カラ一ツノ聚落タル南湖頭若ハ松乙溝及石頭河ニ至ル距離ハ夫々約十支里、十支里、八支里ノ距離ヲ有ツテキル。而シテ之等住民ノ生活様式生産消費ノ状態夫レハ該地域ヲ特色付ケル要素テアルカラ以下ニ於テ一應考察スルコトトスル

(1) 滿州人

彼等住民ノ主タル生産生活ハ農業經營テアルカ生産様式ハ滿人ト鮮人其ノ性質ヲ異ニシ滿人ハ主トシテ畑作ヲ行ヒ鮮人ハ水田經營ヲ行ツテキル。從テ其ノ耕地ノ所在地域ハ相反スルコトトナク利用サレ一般ニ乾燥農業畑作ニ其ノ特殊技能ヲ有スル滿人ハ高燥地域ニ水田ニ對シ其ノ有力ナ技能ヲ有スル鮮人ハ低濕、水田地帯ニ